

# 種山ヶ原

宮沢賢治

青空文庫



種山ヶ原たねやまがはらというのは北上山地きたかみさんちのまん中の高原で、青黒いつるつるの蛇紋岩じやもんがんや、硬い橄欖岩かたらんがんからできています。

高原のへりから、四方に出たいくつかの谷の底そこには、ほんの五、六軒けんずつの部落ぶらくがあります。

春になると、北上の河谷かこくのあちこちから、沢山たくさんの馬が連れて来られて、此の部落の人たちに預けられます。そして、上の野原に放はなされます。それも八月の末すえには、みんなめいめいの持主もちぬしに戻もどってしまうのです。なぜなら、九月には、もう原の草が枯かれはじめ水みず霜しもが下りるのです。

放牧ほうぼくされる四月よつきの間も、半分ぐらいまでは原は霧きりや雲くもに鎖とぎされます。実にこの高原の続きこそは、東の海の側がわからと、西の方からの風や湿気しつきのお定まりのぶつつかり場所ばしよでしたから、雲や雨や雷や霧は、いつでももうすぐ起おこってくるのでした。それですから、北上川の岸きしからこの高原の方へ行く旅人たびびとは、高原に近づくと従したがって、だんだんあちこちに雷神らいじんの碑ひを見ようになります。その旅人と云いつても、馬を扱あつかう人の外は、薬屋くすりやか林務官りんむかん、化石かせきを探さがす学生がくせい、測量師そくりようしなど、ほんの僅わずかなものでした。

今年も、もう空に、透き徹った秋の粉が一<sup>いちめん</sup>面<sup>めん</sup>散<sup>ち</sup>り渡<sup>わた</sup>るようになりました。

雲がちぎれ、風が吹き、夏の休みももう明日<sup>あす</sup>だけです。

達二<sup>たつじ</sup>は、明後日から、また自分で作<sup>つく</sup>った小さな草鞋<sup>わらじ</sup>をはいて、二つの谷を越<sup>こ</sup>えて、学校へ行くのです。

宿題<sup>しゅくだい</sup>もみんな済<sup>す</sup>ましたし、蟹<sup>かに</sup>を捕<sup>と</sup>ることも木炭<sup>すみ</sup>を焼<sup>や</sup>く遊<sup>あそ</sup>びも、もうみんな厭<sup>あ</sup>きていました。達二は、家の前の檜<sup>ひのき</sup>によりかかつて、考えました。

(ああ。此<sup>こ</sup>の夏休み<sup>おもしろ</sup>の中で、一番面白<sup>おもしろ</sup>かったのは、おじいさんと一<sup>いっしょ</sup>緒<sup>しょ</sup>に上の原<sup>こうま</sup>へ仔馬<sup>こま</sup>を連<sup>つ</sup>れに行<sup>い</sup>ったのと、もう一つはどうしても剣舞<sup>けんばい</sup>だ。鶏<sup>とり</sup>の黒い尾<sup>お</sup>を飾<sup>かぎ</sup>った頭巾<sup>ずきん</sup>をかぶり、あの昔<sup>むかし</sup>からの赤い陣羽織<sup>じんばおり</sup>を着<sup>き</sup>た。それから硬<sup>かた</sup>い板<sup>いた</sup>を入<sup>い</sup>れた袴<sup>はかま</sup>をはき、脚絆<sup>きゃはん</sup>や草鞋<sup>わらじ</sup>をきりつとむすんで、種山<sup>たねやま</sup>剣舞<sup>けんばい</sup>連<sup>れん</sup>と大きく書いた沢山<sup>たくさん</sup>の提灯<sup>ちようちん</sup>に囲<sup>かこ</sup>まれて、みんなと町<sup>おと</sup>へ踊<sup>おど</sup>りに行<sup>い</sup>ったのだ。ダー、ダー、ダースコ、ダー、ダー、ダー。踊<sup>おど</sup>ったぞ、踊<sup>おど</sup>ったぞ。町のまっ赤<sup>か</sup>な門火<sup>かどび</sup>の中で、刀<sup>や</sup>をぎらぎらやらかしたんだ。榎夫<sup>ならお</sup>さんと一緒<sup>いっしょ</sup>にな<sup>な</sup>った時<sup>とき</sup>などは、刀<sup>や</sup>がほんとうにカチカチぶつつかつたぐらいだ。

ホウ、そら、やれ、

むかし 達谷<sup>たつこく</sup>の 悪路王<sup>あくろおう</sup>、

まつくらあくらの二里の洞、

渡るは 夢と 黒夜神、

首は刻まれ 朱桶に埋もれ。

やったぞ。やったぞ。ダー、ダー、ダースコ、ダーダ、

青い 仮面この こけおどし、

太刀を 浴びては いっぱかぶ、

夜風の 底の 蜘蛛おどり、

胃袋う はいて ぎつたりぎたり。

ほう。まるで、……)

「達二。居るが。達二。」達二のお母さんが家の中で呼びました。

「あん、居る。」達二は走って行きました。

「善い童だはんてな、おじいさんど、兄など、上の原のすぐ上り口で、草刈ってるがら、

弁当持って行つて来。な。それがら牛も連れてって、草食あせで来。な。兄ながら離れ

なよ。」

「あん、行て来る。行て来る。今草鞋穿ぐがら。」達二ははねあがりました。

お母さんは、曲げ物の二つの櫃と、達二の小さな弁当とを紙にくるんで、それをみんな一緒に大きな布の風呂敷に包み込みました。そして、達二が支度をして包みを背負っている間に、おつかさんは牛をうまやから追い出しました。

「そだら行つて来ら。」と達二は牛を受け取つて云いました。

「氣い付けで行げ。上で兄ながら離れなよ。」

「あん。」達二は、垣根のそばから、楊の枝を一本折り、青い皮をくるくる剥いで鞭を拵え、静に牛を追いながら、上の原への路をだんだんのぼつて行きました。

「ダーダー、スコ、ダーダー。」

夜の頭巾は 鶏の黒尾、

月のあかりは……、

しつ、歩け、しつ。」

日がカンカン照つていました。それでもどこかその光に青い油の疲れたようなものがありましたし、また、時々、冷たい風が紐のようにどこからか流れては来ましたが、まだ仲々暑いのでした。牛が度々立ち止まるので、達二は少し苛々しました。

「上さ行つて好い草食え。早く歩げつ。しつ。馬鹿だな。しつ。」

けれども牛は、美しい草を見る度に、頭を下げて、舌をべらりと廻して喰べました。

(牛の肉の中で一番上等が此の舌だというのは可笑しい。涎れで粘々してる。おまけに黒い斑々がある。歩け。こら。)

「歩げ。しつ。歩げ。」

空に少しばかりの、白い雲が出ました。そして、もう大分のぼっていました。谷の部落がずっと下に見え、達二の家の木小屋の屋根が白く光っています。

路が林の中に入り、達二はあの奇麗な泉まで来ました。まっ白の石灰岩は、ごぼごぼ冷たい水を噴き出すあの泉です。達二は汗を拭いて、しゃがんで何べんも水を掬ってのみました。

牛は泉を飲まないで、却って苔の中のたまり水を、ピチャピチャ嘗めました。

達二が牛と、またあるきはじめたとき、泉が何かを知らせる様に、ぐうっと鳴り、牛も低くうなりました。

「雨になるかも知れないな。」と達二は空を見て眩きました。

林の裾の灌木の間を行ったり、岩片の小さく崩れる所を何べんも通ったりして、達二はもう原の入口に近くなりました。

光つたり陰つたり、幾重にも畳む丘々の向うに、北上の野原が夢のように碧くまばゆく湛えています。河が、春日大明神の帯のように、きらきら銀色に輝いて流れました。

そして達二は、牛と、原の入口に着きました。大きな櫓の木の下に、兄さんの縄で編んだ袋が投げ出され、沢山の草たばがあちこちころがっていました。

二匹の馬は、達二を見て、鼻をぶるぶる鳴りました。

「兄な。居るが。兄な。来たぞ。」達二は汗を拭いながら叫びました。

「おおい。ああい。其処に居ろ。今行くぞ。」

ずうつと向うの窪みで、達二の兄さんの声がしました。牛は沢山の草を見ても、格別嬉しそうにもしませんでした。

陽がぱつと明るくなり、兄さんがそつちの草の中から笑って出て来ました。

「善ぐ来たな。牛も連れで来たのが。弁当持つてが。善ぐ来た。今日あ午まがらきつと曇る。俺もう少し草集めて仕舞がらな、此処らに居ろ。おじいさん、今来る。」

兄さんは向うへ行こうとして、振り向いてまた云いました。

「腹減つたら、弁当、先に喰べてろ。風呂敷ば、あの馬さ結付けでおげ。午まになった

らまた来るがら。」

「うん。此処に居る。」

そして達二の兄さんは、行つてしまいました。空にはうすい雲がすつかりかかり、太陽は白い鏡のようになつて、雲と反対に馳せました。風が出て来て刈られない草は一面に波を立てます。

どうしたのか、牛が俄かに北の方へ馳せ出しました。達二はびっくりして、一生懸命追いかけてながら、兄の方に振り向いて叫びました。

「牛あ逃げる。牛あ逃げる。兄な。牛あ逃げる。」

せいの高い草を分けて、どんどん牛が走りました。達二はどこまでも夢中で追いかけてきました。そのうちに、足が何だか硬張つてきて、自分で走っているのかどうか判らなくなつてしまいました。それからまわりがまつ蒼になつて、ぐるぐる廻り、とうとう達二は、深い草の中に倒れてしまいました。牛の白い斑が終りにちらつと見えしました。

達二は、仰向けになつて空を見ました。空がまつ白に光つて、ぐるぐる廻り、そのこちらを薄い鼠色の雲が、速く速く走っています。そしてカンカン鳴っています。

達二はやつと起き上つて、せかせか息しながら、牛の行った方に歩き出しました。草の

中には、牛が通つた痕らしく、かすかな路のようなものがありました。達二は笑いました。そして、（ふん。なあに、何処かでのっこり立つてるさ。）と思いました。

そこで達二は、一生懸命それを跡けて行きました。ところがその路のようなものは、まだ百歩も行かないうちに、おとこえしや、すてきに背高の薊の中で、二つにも三つにも分れてしまつて、どれがどれやら一向わからなくなつてしまいました。達二は思い切つて、そのまん中のを進みました。けれどもそれも、時々断れたり、牛の歩かないような急な所を横様に過ぎたりするのです。それでも達二は、

（なあに、向うの方の草の中で、牛はこつち向いて、だまつて立つてるさ。）と思いながら、ずんずん進んで行きました。

空はたいへん暗く重くなり、まわりがぼうつと霞んできました。冷たい風が、草を渡りはじめ、もう雲や霧が、切れ切れになつて眼の前をぐんぐん通り過ぎて行きました。

（ああ、こいつは悪くなつてきた。みんな悪いことはこれから集つてやつて来るのだ。）と達二は思いました。全くその通り、俄に牛の通つた痕は、草の中で無くなつてしまいました。

（ああ、悪くなつた、悪くなつた。）達二は胸をどきどきさせました。

草がからだを曲げて、パチパチ云ったり、さらさら鳴ったりしました。霧が殊に滋くなつて、着物はすつかりしめつてしまいました。

達二は咽喉一杯叫びました。

「兄な。兄な。牛あ逃げだ。兄な。兄な。」

何の返事も聞えませんが、黒板から降る白墨の粉のような、暗い冷たい霧の粒が、そこから一面踊りまわり、あたりが俄にシインとして、陰気に陰気になりました。草からはもう雫の音がポタリポタリと聞えてきます。

達二は早く、おじいさんの所へ戻ろうとして急いで引返しました。けれどもどうも、それは前に来た所とは違つていたようでした。第一、薊があんまり沢山ありましたし、それに草の底にさつき無かつた岩かけが、度々ころがつていました。そしてとうとう聞いたこともない大きな谷が、いきなり眼の前に現われました。すすきが、ざわざわざわつと鳴り、向うの方は底知れずの谷のように、霧の中に消えているではありませんか。

風が来ると、芒の穂は細い沢山の手を一ぱいのぼして、忙しく振つて、

「あ、西さん、あ、東さん、あ西さん。あ南さん。あ、西さん。」なんて云っている様でした。

達二はあんまり見つともなかったの、目を瞑つて横を向き直りました。そして急いで引つ返しました。小さな黒い道が、いきなり草の中に出て来ました。それは沢山の馬の蹄の痕で出来上つていたので。達二は、夢中で、短い笑い声をあげて、その道をぐんぐん歩きました。

けれども、たよりのないことは、みちのはばが五寸ぐらいになつたり、また三尺ぐらいに變つたり、おまけに何だかぐるつと廻つているように思われました。そして、とうとう、大きなたつぺんの焼けた栗の木の前まで来た時、ぼんやり幾つにも岐れてしまいました。

其処は多分は、野馬の集まり場所であつたでしょう、霧の中に円い広場のように見えたのです。

達二はがっかりして、黒い道をまた戻りはじめました。知らない草穂が静かにゆらぎ、少し強い風が来る時は、どこかで何か合図をしてもいるように、一面の草が、それ来たつとみなからだを伏せて避けました。

空が光つてキーンキーンと鳴っています。それからすぐ眼の前の霧の中に、家の形の大きな黒いものがあらわれました。達二はしばらく自分の眼を疑つて立ちどまっています。が、やはりどうしても家らしかったので、こわごわもつと近寄つて見ますと、それは冷た

い大きな黒い岩でした。

空がくるくるくるつと白く揺らぎ、草がバラツと一度に雫を払いました。

(間違つて原を向う側へ下りれば、もうおらは死ぬばかりだ。)と達二は、半分思ふ様に半分つぶやくようにしました。それから叫びました。

「兄な、兄な、居るが。兄な。」

また明るくなりました。草がみな一斉に悦びの息をします。

「伊佐戸の町の、電気工夫の童あ、山男に手足い縛らえてたふうだ。」といつか誰かの話した語が、はつきり耳に聞えて来ます。

そして、黒い路が、俄に消えてしまいました。あたりがほんのしばらくしいんとなりました。それから非常に強い風が吹いて来ました。

空が旗のようにぱたぱた光つて翻えり、火花がパチパチパチツと燃えました。

達二はいつか、草に倒れていました。

そんなことはみんなぼんやりしたもやの中の出来事のようにでした。牛が逃げたなんて、やはり夢だかなんだかわかりませんでした。風だつて一体吹いていたのでしようか。

達二はみんなと一緒に、たそがれの県道を歩いていたのです。



そして達二はまたうとうとしました。そこで霧が生温い湯のようになったのです。可愛らしい女の子が達二を呼びました。

「おいでなさい。いいものをあげましょう。そら。干した苹果ですよ。」

「ありがとう、あなたはどなた。」

「わたし誰でもないわ。一緒に向うへ行つて遊びましょう。あなた驢馬を有っていて。」

「驢馬は持つてません。只の仔馬ならあります。」

「只の仔馬は大きくて駄目だわ。」

「そんなら、あなたは小鳥は嫌いですか。」

「小鳥。わたし大好きよ。」

「あげましょう。私はひわを有っています。ひわを一疋あげましょうか。」

「ええ。欲しいわ。」

「あげましょう。私今持つて来ます。」

「ええ、早くよ。」

達二は、一生懸命、うちへ走りしました。美しい緑色の野原や、小さな流れを、一心に走りしました。野原は何だかもくもくして、ゴムのようでした。



「うん。そんだったら許してやる。蟹を百足捕つて来。」

「ふう。蟹を百足。それ丈けでようがすかな。」

「それがら兎を百足捕つて来。」

「ふう。殺してきてもようがすか。」

「うんにや。わがんだい。生きだのだ。」

「ふうふう。かしこまた。」

油断をしていっているうちに、達二はいきなり山男に足を掴まいて倒されました。山男は達二を組み敷いて、刀を取り上げてしまいました。

「小僧。さあ、来。これから、俺れの家来だ。来う。この刀はいい刀だな。実に焼きをよぐかげである。」

「ばが。奴の家来になど、ならない。殺さば殺せ。」

「仲々太いやづだ。来つたら来う。」

「行かない。」

「ようし、そんだったらさらって行く。」

山男は達二を小脇にかかえました。達二は、素早く刀を取り返して、山男の横腹をズ

ブリと刺さしました。山男はばたばた跳ね廻まわつて、白い泡あわを沢たくさん山吐はいて、死しんでしまいま  
した。

急にきゆうまつ暗くらになつて、雷かみなりが烈はげしく鳴り出しました。

そして達二はまた眼めを開ひらきました。

灰はい色いろの霧きりが速はやく速とく飛とんでいます。そして、牛うしが、すぐ眼めの前に、のっそりと立つて  
いたのです。その眼めは達二を怖おそれて、横よこの方かたを向むいていました。達二は叫さけびました。

「あ、居いだが。馬鹿ばかだな。奴うなは。さ、歩あべ。」

雷かみなりと風の音ねの中から、微かすかに兄あにさんの声こゑが聞きえました。

「おおい、達二。居いるが。達二。達二。」

達二はよろこんでとびあがりました。

「おおい。居いる、居いる。兄あになあ。おおい。」

達二は、牛うしの手綱たづなをその首くびから解といて、引ひきはじめました。

黒くろい路みちがまたひよつくり草くさの中なかにあらわれました。そして達二の兄あにさんが、とつぜん、  
眼めの前に立たちました。達二はしがみ付つきました。

「探さがしたぞ。こんな処とこまで来て。何なにして黙だまつて彼あそこ処こゝに居いないがった。おじいさんうんと

心配しんぱいしてるぞ。さ、早く歩あべ。」

「牛にあ逃げだだも。」

「牛あ逃げだ。はあ、そうが。何にびつくりしたたがな。すつかりぬれだな。さあ、俺おらの  
けら着きろ。」

「一いっしょう向寒さむぐない。兄あなのなは大きくて引き擦するがらわがんない。」

「そうが。よしよし。まず歩あべ。おじいさん、火あたいて待まってるがらな。」

緩ゆるい傾斜けいしゃを、二つ程昇ほどもほり降おりました。それから、黒い大きな路みちについて、暫しばらく歩  
きました。

稻いなびかり光あかりが二度どばかり、かすかに白くひらめきました。草やを焼やく匂においがして、霧きりの中なかを煙けむり  
がほつと流ながれていきます。

達二たつじの兄あさんが叫さけびました。

「おじいさん、居いだ、居いだ。達二たつじあ居いだ。」

おじいさんは霧きりの中に立たっていて、

「ああそうが。心配しんぱいした、心配しんぱいした。ああ好えがった。おお達二たつじ。寒さむがべあ、さあ入れ。」  
と云いいました。

半分に焼けた大きな栗の木の根もとに、草で作った小さな囲いがあつて、チヨロチヨロ赤い火が燃えていました。

兄さんは牛を櫛の木につなぎました。

馬もひひんと鳴いています。

「おおむぞやな。な。何ぼが泣いだがな。さあさあ団子たべろ。食べる。な。今こつちを焼ぐがらな。全体何処まで行つてだった。」

「笹長根の下り口だ。」と兄が答えました。

「危いがった。危いがった。向うさ降りだらそれつ切りだったぞ。さあ達二。団子喰べろ。ふん。まるつきり馬こみだいに食つてる。さあさあ、こいづも食べる。」

「おじいさん。今のうちに草片附げで来るべが。」と達二の兄さんが云いました。

「うんにや。も少し待で。またすぐ晴れる。おらも弁当食うべ。ああ心配した。俺も虎

こ山の下まで行つて見で来た。はあ、まんつ好がった。雨も晴れる。」

「今朝ほんとに天気好がったのにな。」

「うん。また好くなるさ。あ、雨漏つてきた。草少し屋根さかぶせろ。」

兄さんが出て行きました。天井がガサガサガサガサ云います。おじいさんが、笑い

ながらそれを見上げました。

兄さんがまたはいって来ました。

「おじいさん。明るぐなつた。雨あ霽れだ。」

「うんうん。そうが。さあ弁当当食つてで草片附げべ。達二。弁当食べる。」

霧がふつと切れました。陽の光がさつと流れて入りました。その太陽は、少し西の方に寄つてかかり、幾片かの蠟のような霧が、逃げおくれで仕方なしに光りました。

草からは雫がきらきら落ち、総ての葉も茎も花も、今年の終りの陽の光を吸っています。はるか北上の碧い野原は、今泣きやんだようにまぶしく笑い、向うの栗の木は、青い後光を放ちました。



## 青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年3月25日初版発行

底本の親本：「【新】校本宮澤賢治全集 第八巻 童話※【#ローマ数字1、1-13-21】  
本文篇」筑摩書房

1995（平成7）年5月25日初版第一刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※底本巻末の大塚常樹氏による注釈は省略しました。

※表題は底本では、「種山ヶ原《たねやまがはら》」となっています。

※「町はずれの町長のうちでは、まだ門火《かどび》を燃していませんでした。その水松樹《いちい》の垣《かき》に囲《かこ》まれた、暗《くら》い庭《にわ》さきにみんな這入《はい》って行きました。」と「そして達二はまたうとうとしました。」の行間に、底本の親本の104、105頁にあたる下記の文章が脱落しているのは底本通りです。

「小さな奇麗な子供らが出て来て、笑って見ました。いよいよ大人が本気にやり出したのです。」

「ホウ、そら、遣れ。ダー、ダー、ダー、ダー、ダー。ダー、スコ、ダーダー。」「ドドーン  
ドドーン。」

「#ここから1字下げ」

「夜風さかまき ひのきはみだれ、

月は射そぐ 銀の矢なみ、

打うつも果てるも 一つのいのち、

太刀《たあち》の軋《きし》りの 消えぬひま。ホツ、ホ、ホツ、ホウ。」

「#ここで字下げ終わり」

刀が青くきらきら光りました。梨の木の葉が月光にせわしく動いてゐます。

「ダー、ダー、スコ、ダーダー、ド、ドーン、ド、ドーン。太刀はいなづま すゝきの  
さやぎ、燃えて……」

組は二つに分れ、剣がカチカチ云ひます。青仮面《あをめん》が出て来て、溺死《いつぷ  
かつぷ》する時のやうな格好《かつこう》で一生懸命跳ね廻ります。子供らが泣き出しま

した。達二《たつじ》は笑ひました。

月が俄かに意地悪い片眼になりました。それから銀の盃のやうに白くなって、消えてしまひました。

（先生の声がする。さうだ。もう学校が始まつてゐるのだ。）と達二は思ひました。

そこは教室でした。先生が何だか少し瘠せたやうです。

「みなさん。楽しい夏の休みももう過ぎました。これからは気持ちのいゝ秋です。一年中、一番、勉強にいゝ時です。みなさんはあしたから、又しっかり勉強をするのです。

どなたも宿題はして来たでせうね。今日持つて来た方は手をあげて。」

達二と櫛夫さんと、たつた二人でした。

「明日は忘れないでみなさん持つて来るのですよ。もし、ぜんたい、してしまはなかつた人があつても、やはりその儘、持つて来るのです。すっかりしてしまはなかつた人は手をあげて。」

誰も上げません。

「さうです。皆さんは立派な生徒です。休み中、みなさんは何をしましたか。そのうちで一番面白かつたことは何ですか。達二さん。」

「おぢいさんと仔馬を集めに行ったときです。」

「よろしい。大へん結構です。櫓夫さん。あなたはお休みの間に、何が一番楽しかったのですか。」

「剣一舞《ぼひ》です。」

「剣一舞《ぼひ》をあなたは踊ったのですか。」

「さうです。」

「どこでゝすか。」

「伊佐戸《いさど》やあちこちです。」

「さうですか。まあよろしい。お座りなさい。みなさん。外にも剣舞に出た人はありますか。」

「先生、私も出ました。」

「先生、私も出ました。」

「達二さんも、さうですか。よろしい。みなさん。剣舞《けんぼひ》は決して悪いことはありません。けれども、勿論みなさんの中にそんな方はないでせうが、それでお錢を貰つたりしてはなりません。みなさんは、立派な生徒ですから。」

「先生。私はお錢を貰ひません。」

「よろしい。さうです。それから……………」

達二は、眼を開きました。みんな夢でした。冷たい霧や雫が額に落ちました。空は霧で一杯で、なんにも見えません。俄かに明るくなったり暗くなったりします。一本のつりがねさうが、身体を屈めて、達二をいたはりました。」

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年9月5日作成

2017年7月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 種山ヶ原

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>